

聖覺を中心とせる法然と親鸞（中）

文學士 松本彦次郎

二

鎌倉時代に於ける新宗派獨立の問題は教會の分離なご外的のものではなくして思想的の方面が主であつた。元來惠心の往生要集は淨土門に關する經文を拔萃し、之に體系を立てた名著であつた。けれども大なる教會組織と傳統とをもつた天台宗から更に新宗派を生せしむるには、因習が重んぜられ支那思想の尊ばれた時代には中々容易でなかつた。「夫立宗名在華嚴天台等八宗九宗、未聞於淨土之家立其宗名、然今號淨土宗有何證據也」との時代人の難問に對し、往生淨土の教には無量壽經觀無量壽經、阿彌陀經と、天親の往生論の一論が

あると新宗派の思想上の系統を述べ、天台眞言は「各相承血脈」がある、然るに「今所言淨土宗有師資相承血脈譜乎」との詰問に答へては淨土の血脈については古來二説があるけれど自分は道綽善導相承の血脈によると論じてゐる（選擇集）。之に對する駁論は當時幾つも出たけれども到底法然を屈服せしむるに足る程のものではなかつた。

通常親鸞と論ずる學者は親鸞が本願寺を創設したかごうかに重きを置いてゐるけれども、この疑問は法然まで推し及ばさねば徹底しないのである。元亨釋書の著書師練は釋書の目録には大谷寺源空と掲げながらこの寺院を建てたことに一言も及んでゐない。源空の事蹟をば脚色してかいた勅修御

傳著者は「大谷は、上人往生の地なり、かの跡いまにあり、東西三丈、南北十丈ばかり、このうちにてたてられけん、坊舎のかまへにかあらんと見えたり、その節儉のほども、おもひやられてあはれに、たどくぞ待る、いまの御影堂の跡これなり」と感慨をのべ、大谷におちつくまでは賀茂の河原屋小松殿、勝尾寺、など居を移したことを記してゐる。特定した教會や寺院を有しなかつた所に宗教改革者の奮闘ふりはあらはれてゐる。原始眞宗は此點に於いて淨土宗よりも劣つてをうたらう。慈圓は愚管抄に「又建永の年法然房と云上人ありきまちかく京中を住所にて念佛宗を立て専宗念佛と號してたゞ阿彌陀佛とばかり申べき也」とあるのも、法然が一定の住所を有してゐなかつたことを證明してゐる。かくの如く新宗教は寺院教會よりも布教に重きを置いてをつた。法然は寺院や教會を眼中に置かなかつた自由思想家であつたとすれ

ば、法然とその弟子との關係は後世とは餘程ちがつてあるべき筈である。それは舊宗教に屬し寺院を有した僧侶が法然の信仰に共鳴し、その弟子となつた場合に弟子の方が居往の寺院を追放されざる以上却つて宗祖よりも先きに寺院を有することになるのである。そして法然は天台宗より獨立した際は、天台宗側よりしたら自分の宗派に關係のない路傍の人になり、破門された有様であつたらう。けれどもこの宗教改革者に直に迫害の及ばなかつたのは法然の思想は天台宗の一部分であつて學說としては反對のものでなかつたのである。けれども法然の宗教は又一面に學說よりも體驗に重んじた宗派である。そして智識階級の人によりも一般國民の救濟を企てた結果、その教義は簡單化され、「この行者に成ぬれば女犯をこのむも魚鳥を食も阿彌陀佛はすこしもどがめ給はず一向專修に入て念佛ばかりと信すれば一定最後にむかへ給ふ

ぞ」と世間のある方面から解せらるゝ様になつた。又法然の弟子の住蓮などは六時禮讚を行ひ、形に拘はれない新しい佛教音樂を以て多くの婦女を集め、その結果風俗を壞亂するに至つたことは争ふべからざる事實である。けれども新宗教は捉はれた古い思想をば捨て、民衆を信仰に入れた光明の分子は暗黒面よりも遙かに勝つてをつたのである。けれども豫言者先覺者は時代の迫害から免るゝことは出来ないし、又改宗者の主張は往々熱心に過ぎて排他的になりがちである。法然一派が異端者として所罰せられたのは他の宗派を誹謗すること風俗を壞亂することの二點にあつた。日蓮は淨土宗をば第一の敵としてゐるのは淨土宗の人々の排外思想を慊らなく思つてあつたからである。

實際淨土宗の排斥者は叡山と南都とであつた。けれども往生要集をばどの宗派でも顧みない譯に行かない時代に思想上から法然の宗旨をばあくま

で追迫することは出来ないのである。寧ろ淨土宗壓迫は新しい宗派への嫉妬と、名門の出の多い舊寺院の階級的差別の觀念とに基いてあつたのである。よく鎌倉時代を研究してみれば他宗を思想上より排斥したのは舊宗教ではなく却つて淨土宗、日蓮宗の如き新宗教であつたのである。何故に舊宗教は思想のことについて寛大であつたかと云ふに東大寺や四天王寺の如きはどの宗義を學ぶことも勝手であつた。東大寺再建の勸進の第一人者たる俊乗坊重源は空阿彌陀佛と名乗る程の法然の崇拜家であつた。彼は法然の弟子たるの故を以て一度も所罰はされなかつた。然らば日本に於いて佛教が分派されない時代に建てられた四天王寺、諸國の總國分寺と仰がれた東大寺のみが自由の研究所であるかと云ふに決してそうではない。時代は遅れるけれども元慶十三年附の三千院文書の中に「天台眞言傳法之旨眼心相通水乳和合故南岳天台

三觀一心之宗」と云うてゐるのは天台眞言の妥協を最もよくあらはしてゐる。

法然に先き立つて九條兼實の最も歸依した僧侶は佛嚴上人であつた。佛嚴は弘法の像を拜したり不動に祈禱してゐるから眞言宗の僧侶であつたことがわかる。それにも拘らず彼は後白河法皇の勅命により十念極樂易行集を編纂した、兼實は「佛嚴房來、令見抄出之法文其名十念極樂易行集六卷珍重也、但清書也(玉葉安元二年十二月廿九日)」と記してゐる。兼實は祈禱によつて一面に現世の幸福を得ることを請うてゐるけれども、それよりも彼は往生極樂に遙かに重きを置いてをつた。彼は佛嚴を招いたのは殆んど念佛の爲めであつた。兼實が法然に歸依する道を開いたのは佛嚴其人であると云うても過言ではない。

眞言の僧侶なる佛嚴は天台宗の範圍を犯して極樂門の著書を書いたのは彼一人が天台宗に精通し

てをつたと云ふ譯ではない。鎌倉時代の舊寺院の僧侶は他宗の學問をする必要があつた。それは大寺院内に行はれる論義である。論義には宗派の差別なく各宗の僧侶は一堂に會せねばならなかつた他の宗派の宗義を解せなければ論義は出來ないから自然列席の資格はなくなる譯である。東大寺戒壇院の凝然は淨土法門源流章の著書として淨土宗に於ける第三者の公平なる理解者と云はれてゐる。彼はその師圓照の傳を詳記してゐる。之によつてみると圓照は八宗を皆學び、更に禪を研究し、最後に隆寛について淨土宗をきいた。勿論東大寺には平安朝に既に永觀の如き淨土門の理解者はあつたのである。圓照は「永觀亦生極樂、西方淨土殊勝奇特、後學順欣樂」(圓照上人行狀)と永觀を慕ひ、その死に當つて來迎讚を誦し、念佛を連續して此世を去つた。

永觀は彌陀要記、往生十因の著書として日本に

於ける淨土思想の早い理解者として顯著たる一人ではあるけれど彼に先立つて惠心は往生要集、一乘要決を著はして淨土門を力説してをる。惠心は宗教に加へて藝術家的天才を有してゐただけ、雷ひのある信仰の鼓吹者として後世により多く影響を残してゐる。殊に聖徳太子の復興せられた鎌倉時代に彼も亦強い力を以て復活された。鎌倉時代に聖徳太子があらゆる方面より各宗派の人々によつて崇拜せられたのであるけれども、この點は最も時代の人々を惑きつけたかと云うと眞俗相依の體験そのものであつた。慈圓の如きは「是則王法護佛法、佛法護法之故。況我朝神國也（曼珠院慈鎮和尚自筆御修法記）」と論じてゐる。彼の宗教的理想は國家に實現せらるべきものであつた。宗教と國家を一致せしむる眞諦俗諦の相依は聖徳太子に於いて實現されたのである。この思想は日蓮に至つて更に純化されたと云うてよい。平安朝に於

ける宗教の貴族化と云ふことは眞諦俗諦を分離せしめ、俗諦を遙かに重んじた結果、貴族の寺院に入るもの多く爲めに貴族的階級の思想をば宗教に移してしまつたのである。平安初期には弘法や傳教の如き名僧があらはれ平民が實力によつて宗教上の地位を築いたことを示したのであるけれど、中期以後になれば叡山南都の僧位僧職は名門藤原氏の出が殆んど獨占する有様に變つてきた。公卿は政治上に於いて失うた地位をば宗教方面に恢復した有様とも見られる。試みに尊卑分脈を繙き兼實の兄弟だけの系圖をみても惠信、信圓、慈圓、覺忠、最忠、尊忠など大僧正や僧正になつてゐる政治、經濟の方面では武家の方が貴族の勢力を凌いだけれども由緒ある大寺院は却つて貴族の子弟が獨占する有様となつた。武士出或は平民出の僧侶は舊教會を根據とすることは困難になつてきたから、教會を離れて自由に布教する風が鎌倉時代

に至つて非常に盛んになつた譯である。法然も自由思想家であつたけれども彼は頼朝を後援としてゐる兼實の保護をうけ、又彼の布教地は帝都中心で地の利を得た爲めに諸宗出の僧侶にして彼の教をきいた人々も多くあつたことは争はれない事實である。

法然と法然の門下との關係の研究について困難を感じるのは門下の中に僧侶と俗人の交じつてゐる點もあるのである。僧侶ではないけれども往生要集勸文の著者に擬せられてゐる平基親(最後の出家は別として)の如き選擇本願集の序をかいたとか、又彼は法然に書を送つて深信本願修念佛者は婬酒食肉等の諸惡業を避けずともよいと云ふ邪人の説如何、を問うたことは漢語燈録に見えてゐるが大日本史料編者の疑うてゐる如く、これは確かに疑ふべき事實である。往生要集に關係あるをかいた人々をば皆法然の弟子に擬する淨土宗の史料文書は到底無條件に信せらるべきもので

はない。同じく公卿仲間の澄憲は後白河法皇の爲めに往生要集を講じてゐる所なごより考へても、この書は鎌倉時代に最も廣く讀まれたことをあらはすもので法然の一手販賣の名著ではなかつたことがわかる。

親たる貴族でもその子弟を出家せしむる際は自分の一族の出家せる人々と頼むことは勿論であらうが、これと同時に子弟が僧侶として出世するに都合のよい寺院を宗派に拘らず選ぶことであつたらしい。兄弟にして高野山、南都、叡山など諸種の派に分れ／＼になつたのもこれが爲めである。各宗派の對抗心が外的の權利争ひに強くあつてもそれは下級の僧侶が主で、宗義など精神的の方面は互に寛容力を持つてをつたのである。

淨土宗と云ふ新宗教があらはれた際に、宗義の上から之を争うた解脱や明惠の如きもあつたけれども、淨土宗が天台宗より分派し得るとか、新宗派

が風俗で亂すなどの外的なことであつて宗義とか思想とかの根本問題にはふれてゐなかつた。多少思想問題があつても思想問題そのものよりすぐに腕力に訴ふることは稀れであつた。殊に叡山側では法然の思想は源信に系統をひいてゐる以上思想上から正面に之を駁することは實際困難であつた例の元久元年十一月七日の法然以下署名した起請文も他宗の誹謗するとか、念佛門に於いては無戒行でありながら守律義者を雜行人とし、彌陀をたのむ本願者は造惡を恐るとか、恣に私義を述べて諍論を企つとかなど、宗義の内容が悪いと云ふのではなく、誹謗するとか、道徳を顧みないとかなど外的行爲がその缺點とされてゐる。日蓮が淨土宗を第一の敵としてゐるのは關東に於いては日蓮宗は舊宗教側ではなく却つて念佛の徒から迫害を受けた爲めであらう。現に建永元年二月十四日興福寺の衆徒が法然及其徒行空遵西等を訴へた時も

他宗を謗することを重なる理由としてゐる。朝廷では法然の門下を所罰する宣旨を出すことについて諸卿に謀つた際に興福寺の壓迫を恐れてその云ふことを聞くことになつたが基房は諮問に應じ「稱念佛停止宜旨若雖一人翻信心者已罪業也、此條尤可有思慮」(三長記建永元年二月十四日)と、念佛そのものには同情をしてゐる。法然の徒でなくとも臨終には念佛して往生することは一般にやることであるから思想上から淨土宗を非難しにくかつたのであらう。

たゞこゝに注意すべきは法然門下のうちで何人が法然の正系をついたのであるかの問題である。現に法然の生存中に一念義が淨土宗の中から分派されたことである。殊に法本房行空は一念往生の義を立て他宗を謗つたと云ふので興福寺に訴へられた際に法然及行空は殊に不當であると云ふので之を破門した。之れによつてみれば當時遵西行空

の二人が同時に罰せられたのに行空のみが破門されたとすれば行空は思想上に於いても法然とは一致しなかつたらう。又後世一念義の正統の如くはれる成覺房幸西の一念宗^⑥が法然の死後凡二十年後に存したことは明月記に見えてゐる。成覺は法本の弟子であるか、法本は成覺に教はたか、或は一

念往生と一念宗(一念義)と別のものであるか研究を要する。行空の一念往生のこと三長記に見えてゐる以上彼を一念義の祖と見る説も根據ないとも云ひない。現に法水分流記著者靜見は行空をも一念義を立てた人としてゐる。そして成覺房幸西をも一念義の祖としてゐる。けれども行空の下に立一念義としながら幸西のことには何等の一念義のことは説明をもしてゐない。一念義の開祖についても幸西、行西、何れかであると云ふことは今日から之を知ることには難いのである。況や白河門徒多念義、鎮西義、一念義と法然の直門の人々か淨

土宗の中より又小派をつくるとすれば法然の眞の後継者は誰であるかの問題についても研究を要する。殊に法然在世中既にあるものは一念義を立て、問題を起したからに於いてをや。

勅修御傳によれば大和前司親盛法然の死後疑あらば何人に之を決してもらうかを法然にきいた際に「聖覺法印わが心をしれりとの給へり」とし、又隆寛についても法然は懷より一卷を出し「これは月輪殿の仰によりて、えらび進するところの選擇集なり」云々として之を書寫せしめたとある。聖覺と隆寛と二人が最も重くなつてゐる、聖覺と隆寛が法然の主旨を最も傳へるものとして勅修御傳よりも先きにこのことを傳へたのは弘安六年に書寫されたと云ふ明義進集である。このうちに法然の語として「吾が後ニ念佛往生ノ義スクニイハムスル人ハ聖覺ト隆覺トナリト云々」どの詳はしいことは勅修御傳と略同じことを傳へてゐる。たゞ

その叙方は稍粗朴の點ある所が優つてゐる。明義進行集の第一卷が存してあつたら法然直門の人々と法然との關係を細かに知る史料であつたかも知れない。黑板博士が河内國天野山金剛寺に始めて發見した前記の明義進行集の第二卷、第三卷、(一卷缺)の開卷勿々の所に「抑源空上人ト同時ニ出世セル諸宗ノ英雄ノナカニ化導ニ隨テサハヤカニ本宗ノ熱心ヲアラタメテ專無觀ノ稱名ヲ行シテ往生ノ望ヲトケタルヒトヲオホシ、今入滅ノ次第ニヨリテソノ義ヲイハ、」と靜遍、明遍、隆覺、空阿彌陀佛(無智の空阿彌陀佛)、信空、覺楡、聖覺の七人をあげてゐるが、小序の示す如く中途に改宗し法然に歸した人々の傳を主としてゐる。聖覺のことは後に論ずるとして多念義の隆覺が進行集に最も注意を拂はれてゐると云ふことを念頭に置く必要がある。若、勅修御傳は大部分進行集によつたものとすれば一卷が發見せらるゝことあつても法然門

弟の地位に大變化がないものと思はれる。

既に論じた如く鎌倉時代に於いては舊宗派の仲間では互に世俗の權力争ひなどを主として思想上より相反目することは稀有であつたと云うてよい又親鸞の子孫が弱年の際他の宗派の教育をうくる習慣のあつたことなど後世の排他宗時代と異つてゐる證據である。かう云ふ時代に法然とその門下の人々との關係を知ることが困難であるし、又大低の宗派で臨終念佛には重きを置いた時代に、法然と共通の思想を有してゐるものあつたとて之を法然の弟子の如く思ふことは誤である。凝然の淨土源流章に「源空大徳門人非一、各揚淨教、互恣弘通、但立門葉、横豎傳燈」とある通り、淨土宗の内部自身が混亂されてゐる時代に、他宗に屬するあるものが法然と共通の思想をもつてをつたとして法然門下の如く考ふるは注意すべきことである。そして玉葉、明月記、三長記などと、行狀畫圖と

を比較する際に兩者に著しい距離あることを發見するのである。

三

鎌倉時代はどの宗派も自派の宗乘のみを學ぶ習慣をもつてゐなかつた。蓮如は大乗院の經覺の弟子であつたと云ふことも眞宗であつてもその子弟をば始めから一派に固つた學問のみをさせなかつたことの尙室町時代にまで残つたことを證據立てゝゐる。随つて子弟關係と云ふ意義も後世と異つてくるのである。法然以後遙かに遅れて編纂せられた法然上人行狀畫圖は往々誤つて法然と關係のないものまでも法然の弟子扱にしてゐる。慈圓の如きはその迷惑を蒙つてゐる一人である。慈圓は法然及其門下の淨土宗の人々をば「建永の年法然と云上人ありき、ましがかく京中を住所にて念佛を立て專宗念佛と號してたゞ阿彌陀佛とばかり申

べき也、それならぬこと顯密のつとめはなせそと云事を云出し、不可思議の愚痴の尼入道によるこばれてこの年たゞ繁昌に繁昌してつよくおこりつゝ中略この行者に成ぬれば女犯をこのむも魚鳥を食も阿彌陀佛はすこしもどがめ給はず一向專修に入て念佛ばかりを信すれば一定最後にむかへ給ふぞと云て」(愚管抄第六卷)と露骨に批判し、法然の最後についても「法然はあまり方人なくしてゆるされて終に大谷と云東山にて入滅してけり、それも往生く」と云爲して人聚りけれどさるたしかなる事もなく、臨終行儀も増賀上人などのやうにはいはる事もなし」と極めて同情のなき叙述をしてゐる。然るに行狀畫圖は慈圓と法然の關係について「上人諸宗の大綱をあげて一々の義理をつくさるゝに、皆是上代上機のためのをしへにして末代下根のたぐひをひがたし、淨土の宗旨稱名の本願のみぞ苦界の船愛河の橋梁にて、愚痴下智の當

機にあひかなへるとて聖道淨土の奥義をのべられければ、和尚隨喜の御心ねんごろにして、一乘圓頓の戒をうけ、散心稱名の行をぞ崇重せられける」と、鎌倉一代の學者慈圓をば、法然に最後に法を尋ねた重衡と同じ程度に扱つてゐる。けれども慈圓自身の書いたものを検査してみても、一つも法然の思想の感化をうけたものはない。慈圓自筆の修法記に「寺領の年に加増南北二京堂舎連薨、五畿七道寺領滿境、是則爲王法護佛法、々々護王法之故也、何況我朝神國也(三十二院文書)と、彼は名門の出である爲めに宗教を論ずるにもいつも國家を念頭にはなさないのである。そして彼は「佛子扶三代執政之萬機ヲ。護一人寶祚之政道ヲ。其間所蓋乎中心者興隆佛法」(曼珠院に於いて三浦博士一行の發見せる慈鎮自筆文書による)と、皇室の爲め國家の爲めに佛法興隆を理想と中心にひそめてゐる。愚管抄を著作した動機もこゝにあつた。た

ゞ彼は思想的に歴史を書いた爲めに徒らに悲憤慷慨的の句調をば用ゐなかつた。彼の目には新宗教の人々は餘りに民衆に媚び、戒律など眼中に置かない態度をとつたことに反感を有したのであつた。彼は情の人よりも寧ろ意志の強い人であつた。藤原定家は「長子台嶺之密宗、其行法勇猛精進」と慈圓をば天台宗の學者として特に密教に長所のあつたことを力説し、その往生の有様をば「後聞正念無違亂、自他唱釋迦寶號狀首西面臥給」(明月記安貞元年四月十日の條)と記してゐる。この時代の人はどの宗派でも臨終念佛をするのが常であつた。然るに慈圓は其死に至るまで淨土門に屈從をしな

いで釋迦の寶號を稱へた所に彼の眞面目はあらはれてゐる。彼はあくまで新宗教に反抗をつけたのである。彼は又淨土宗のみならず禪宗に對しても好意を表しなかつた。鎌倉幕府保護の下に頭をもちあげた禪宗の葉上房榮西の僧位に叙せらるゝ

問題の起つた際に、定家は「今日榮西印可賜大師號由有其聞、又有儀定等、今日無其事、不云定説云々、聞驚不少、存生大師號我朝先縱無之、誰人何議定乎」と事情を有のまゝに叙してゐる。恐く榮西は幕府の威力を笠にきて異例のない難題をもちかけたのであらう。慈圓はこの事件に暗中飛躍を試み爲めに榮西が其目的を達することの出来なかつたことについて愚管抄に「大師號なんと云あさましき事さたありけるは慈圓僧正申といめけり猶僧正には成にけるなり」と。問題は政治的色彩を帯びてゐるだけ慈圓も躍起となつて反對を試みたのであらう。慈圓は自分が名門の出であることをついても忘れなかつた。彼の性質はどうしても民衆宗教家の一人法然に屈服し得なかつたのである。

然らば何故に行狀畫圖は慈圓をば法然の弟子扱ひにしたかと云ふと、法然は嘗て天台宗で學んだ

學者としてその授戒については何人も追従を許さないものを有してをつた。兼實は上西門院の御授戒の際に前例を破つて無位の一僧侶を宮中に入れたことにつき「此日請法然房上人源空、中宮有御授戒事、先例如此人強不參貴所之由有傾輩云々、是不知案内也、授戒者是事不聊爾、禪宗仁忠等之時までは名僧等皆好授戒、自其以後沒却無此事、近代上人皆學此道又有效驗仍不願傍難所請用也」(玉葉と周圍の人々の反對を顧みずに法然を保護したとを記してゐる。法然は兼實の如き擁護者が必要ならば到底宮中に入れなかつたのである。恐らく法然の宮中に出入したことはこの時だけであつたらう。然るに行狀畫圖は建久三年二月廿六日に後白河法皇の御病篤かりし際に法然が御戒を授けてまつたとしある。けれども兼實はこのことを玉葉に一行もかいてゐない。そして三月十三日に御臨終のことにつき「善知識上人湛敬本成房、仁和寺

宮勝賢僧正候之、十念具足、臨終正念、面向西方
手結定印、決定往生、更不疑云々(玉葉)としてあ
る。後白河法皇は今様の名人であらせられ、白拍
子をば御所に召された御方であるから、既に上西
門院に法然が御授戒をせられた例もある以上法然
は御所に御出入の出来ないこともなかつたらう。
けれども、後白河法皇は佛嚴に命じ往生易往集を
かゝせ給ひ、又澄憲などに往生要集を講せしめ給
はつてゐるから周圍の反對まで斥けて法皇の御臨
終に法然を呼ぶ必要はなかつたらうし、兼實も亦
法皇をば寛仁の御性質で御慈悲の深かつた御方と
敬服せられてゐるのに法然の後白河法皇の御臨終
につき何等論及してゐない點から推しても法然が
後白河法皇に御授戒したとの行狀畫圖の説には賛
成出来ないのである。

淨土宗が宮中に深い關係を有するに至つたのは
淨土門源流章に「證惠上人初承證入、後附證空、西

山法門、深得淵府、後嵯峨天皇御宇、甚播法威以
所承法、奉授于天皇」とある通り、後嵯峨天皇時
代以後のことである。法然上人行狀畫圖が、後嵯
峨天皇の御勅命により編纂せられたとの説を生ず
るに至つたのはこの時代は淨土宗が外的にも認め
られた時期であつたからである。法然の崇拜者た
る兼實すら法然を授戒の第一人とほめた外その性
格については殆んど評してゐない。玉葉によれば
寧ろ佛嚴上人の方が法然上人よりも遙かに重んぜ
られてあつたとも見られるのである。それは作州
稻岡の郷士の子である法然は名門の出の僧侶が大
寺院を獨占せる時代に社會的に優遇を受けにくか
つたのである。そして當時の記録を残した人々は
皆名門の人であるし、又一方思想が自由の時代で
あり、法然の弟子が法然在世中に互に思想を異に
し、いづれが法然の正當であることの決し難い時
代であり、又中心となるべき淨土宗の敎會さへな

く不統一の状態であつたことも法然にとつて不利益であつた。そして新しい宗教は信仰の宗教であり、宗祖の行爲は周圍から監視されてある時代に宗祖に超人的奇蹟を要求することが無理である。平安朝に理想化された増賀上人と疑ひの目を以て見られた法然との臨終を比較し、法然の臨終に奇蹟なかつたと慈圓が愚管抄に論じてゐるのは確かに誤りである。新宗教に何等の奇蹟もない所に法然のえらい所がある。然るに例の勅修御傳は法然をば讚岐に流され生福寺にあつた時に勢至菩薩の像を自作し、「法然本地身、大勢至菩薩、爲度衆生故、顯置此道場」と置文をしたと誠にやかにかいてゐる。本地身とか化身とか云ふことはどの祖宗にも附會することであつて勅修御傳だけの試みではない。けれども法然の在世中東大寺の俊乘坊重源は「阿彌陀の化身と云ふこと出てわが身の名をば南無阿彌陀佛と名とりて萬の人の上に一字おき

て空阿彌陀佛法あみた佛など云名を付けるを誠にやがて我名にしたる尼法師おほかり(愚管抄)と云ふ有様で、化身など云ふことは俊乘坊自ら云び出したことらしい。法然が至勢の化身とされたことも法然の死後間もない時からであらう。日蓮は立正安國論中に法然をば勢至の化身と號したこともや善導の再誕と仰いだとかいてゐる。勿論宗祖自ら佛の化身と偽りなく信することもあらう。神祕とか奇蹟とかに愚民を惑はす宗教の祖にはこう云ふ云ひふらしは殊に多い。生きてある間に法然にそう云ふ風聞のなかつた所に彼の改革者たる性格はあらはれてゐると思ふ。民衆宗教家が後世より貴族化せらるゝ時代になつて却つて其生きてあつた時代に權門と重き關係あつた如く後から云ひふらして自分の宗教に價値を附けやうとするのである行狀畫圖作者が慈圓と法然との關係を密接たらしめようとしたのはこの目的の爲めであつたのであ

らう。聖覺法印の如きは同じく貴族出身の僧侶でありながら其著唯心抄は淨土宗と共通の思想をのべてゐるだけ法然の弟子扱ひされた後から本當

らしくかゝれても、それ程破綻は生じないのである。

後淡海宮御宇天皇論（上）

文學博士 喜田貞吉

一、緒言

天智天皇淡海の大津宮に天が下治ろし給ふこと四年、辛未の歲十二月三日を以て此の宮に崩し給ひ、翌壬申の歲には所謂壬申の亂ありて、淡海の軍利を失ひ、大友皇子は畏くも長等ながらの山前やまざきに縊れ給ひて、政權は自ら襲に一旦儲位を辭し給ひし大海人皇子の御手に歸し、翌年二月此の君大和の飛鳥淨見原宮に於て即位し給へり。之を天武天皇と

申す。こゝに於て後に此天皇の皇孫女とます。元正天皇の御代に於て、皇子とます舍人親王を總裁と仰ぎて編纂せられたる日本書紀には、淡海宮御宇天皇と仰がれ給ふ天智天皇の御次に、別に後淡海宮御宇天皇のましませしとを認めず、天武天皇を以て直ちに天智天皇の御次に列し奉ることゝなれり。然れども、天武天皇の治世を壬申亂平定以後の事なりとなさんにはさてもあれ、其の以前に於ける天下の政治が此の君の御手に出でたりきとは